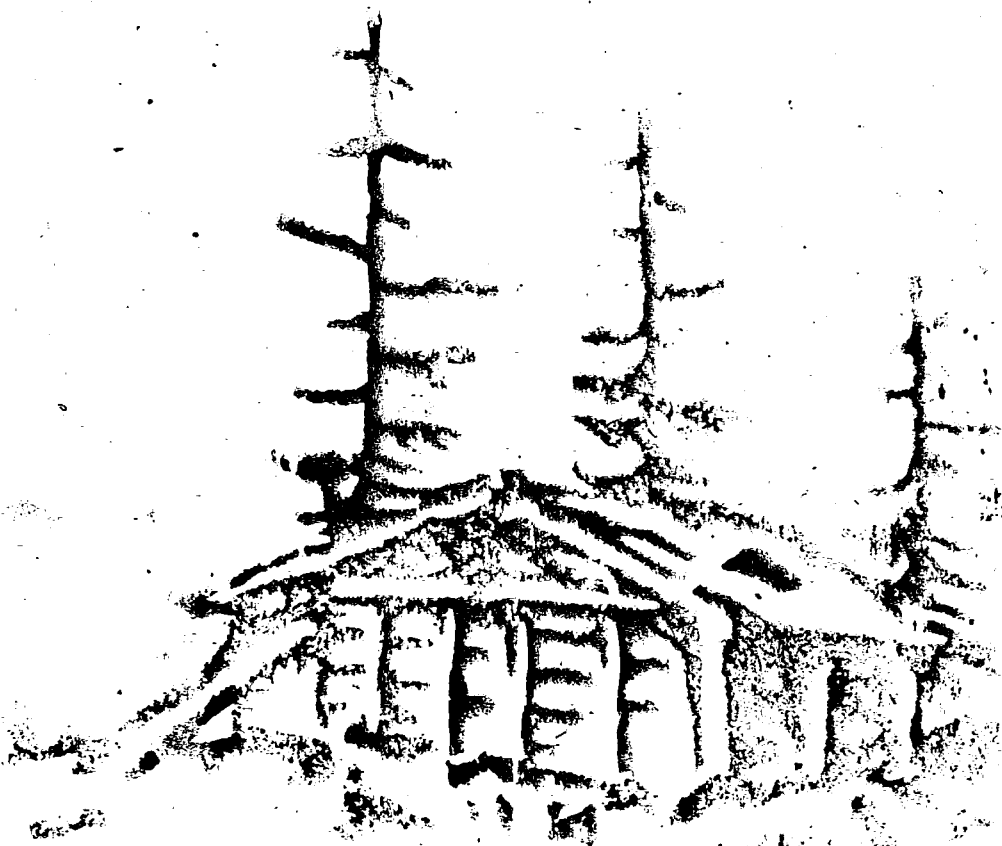


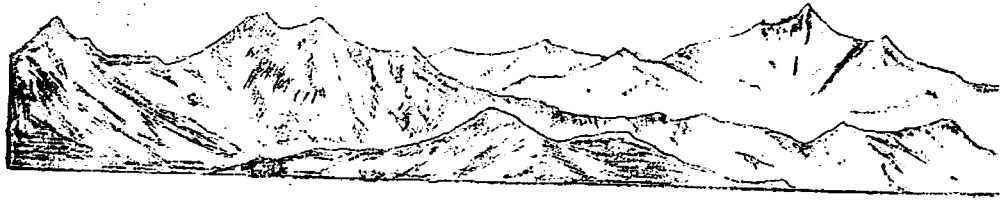
新報

新報

NO. 2



新報



部報 第二号目次

三年生を送るに際して 笹野幸夫 (一)

卒業にあたって 中川浩一 (一)

春の山行計画 (三)

五月の甲武境にて(詩) 重光 (三)

山行報告 川苔山 笹野 記 (四)

例会記録 (七)

出集 北アルプスを慕ひする 司馬正次 (九)

或出集 或出集 M・T (九)

想特 山日記より(明神明星 小樺山) 笹野幸夫 (九)

山麓通信 (九)

表紙 山小屋 河内元弥 (九)

三年生を送るに際して

笹野幸夫

三学期も終りに近ずき、一年間のしめ線りとも云うべく何となくいそがしいものを感じますが、その中から部報第二号を発行するに至りましたことを衷心より喜ぶと共に、原稿を書いた下された先輩始め部員諸君の偉盡力を感謝致します。

三年生の皆林も上級学校への進学が間近かにせまり何かと多忙のことでしょが、秋々下級生としても皆様とのお別れがつかなく種々の想い出が走馬燈の様に頭中をかすめぬのですが、これも皆林の存在中部に對する一方ならぬ熱意の賜と重ねて、こゝに感謝の意を表はす次第です。

そで、この年度の部報内容は昨年を中心とした題材を特に集め、皆林の多少なりとも想い出となれば幸いと存じます。中川さんも卒業にあたり、お題目としておいそがしい中を御寄稿され、我々としても諸先輩の後を受け継ぎ、今後に課せられた重大な任務を少しでも果たして行くべく努力しようと思っております。

終りに三年生諸君の御成功を祈ると共に、山岳部の発展を切に願ひます。

卒業にあたりて

中川 浩一

いよ／＼卒業が近づいたが、それと一緒にいそがしい入学試験も近づいて来た。お蔭で山之行くことも出来ず、学校の往復にばかりの山々を眺めて溜息をつくばかりと云つた情ない有様である。山岳部も発足以来今年で五年、発足当時から較べれば随分設備もとのつては来たもの、まだザイル一本すら部で持つ事が出来ない。現在の予算の状態では来年もどうかと思はれるけれど、そ二は二年の諸君の才腕にまっただけである。やろうと思つておつた事の十分の一も存すことが出来ず、卒業して行くのは心のこりであり、又景じて部にこころけんしたのやら、それとも又かえつて悪影響をあたえたのやらうたが、けいものである。随分だらしのない委員ぶりであつたし、存した仕事に對しても反省を加えなければならぬ。

だらけ、どうもベストを盡したとは云えやうもない。全く申さ分けないことだらけだが、どうかおゆるし願いたい。その中で今年やろうと思つて出来なかつたことを宿題として残し、皆様の奮闘をお願ひしたい。一つは「部則」のこと、今年迄の伝統のルーズ振り目にあまるばかり（これも元をたゞせば僕の不徳の至りだが）集会の集りは悪く、けじめをわけける意味からも、部として最良の活動の面から、これは是非定めていたいただきたいものである。それからもう一つは山行の方法で、今年迄はどうもたゞ慢然と登つており、生物の研究と云つた面に新しい面を開いて、今迄は登るだけでなく、ルートの研究、生物の研究と云つた面に新しい面を開いて、欲しいもので、又岩登の講習会も去年計画して出来なかつただけに、是非やつていただくべきものである。

去年の部算は三年が主体であつたために、卒業でゴッソリ穴があいてしまつたが、幸に一年の諸君が多数入部して来られたが、その方たちも少し注文を残して行く。幸に一年の諸君が皆さんも新宿駅へ行くときよく見られるあの「インク」登山術の大家達のこれみよがしの恰好、あんなまねは絶対にしてはいたゞきたくはない。何も自分の技術は人にみせびらかすものでないのだから。又西高の山岳部算だといふ自覚を持つて行動していただきたい。それからもう一つ、これはあまり存じませんが、知識をふりまわさなさいこと。これをどうも、おまゑ山になつたり、白馬が、ヤスく又思はぬ恥をかくものになる。御前山が「おまゑ山」になつたり、白馬が「沈黙は金」、なるべく余計なおしこべりはつゝしむこと、以上をお願ひして行くことと思ふ。

では最後に今後の部の発展を希望して、黙文のしめく、りをつつようと思ふ。皆さんもどうか仲よく、山岳部をますますよく、部にするために、つくしていただきたい。

春の山行計画



二月十五日の総会で、春期計画を次の様に決定した。部員諸氏の活躍を期待致します。

○天城主脈縦走

期日 三月下旬

コース 修善寺—天城峠—八丁池—戸塚峠—万三郎岳—万二郎岳—遠笠山—一碧湖—伊東費用 約五百円

○丹沢主脈縦走

期日 四月二十九—三十日

コース 橋本—鳥屋—風巻—焼山—茶臼山—姫次岳—地藏岳—蛭ヶ岳—不動峰—丹沢山—塔ヶ岳—一本松—大倉—沢費用 約三百円

詳細は期末考査終了後決定する。

五月の甲武境にて

重光

萌え初めたる五月の若葉をすかし見
 ひともとの山吹を手折って
 甲武の尾上をたどって行った私
 現実への憎悪と狂った嫉妬を
 汗ばむ五月の空に押しやりながら
 虚飾を厭うて登り来たこの分水嶺

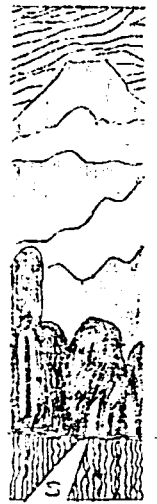


ふと名も知らぬ小花に感傷を侵し
 思はずうしろさふり返ると
 躁狂と躍起したうき人の世の気配
 さのうの五月雨にすっかり消え去っていた

そうしてそよ吹く風に
 いつか見つめる未濃模様のふるさとのあなた
 あゝかの崎岬とした柳揚を知る人のありや無じや

それでも
 新鮮な山翠は嶮崖をつたい
 みずみずう香れる五月の山は
 都会人の感傷をよめる

名も知らぬ白き小花に
 いつまでもいつまでも思ひ去を綴ってるようだった。



山行報告

第二十二回例会

川苔山 (日帰り)

二月五日

〔夕イム〕立川駅発(七二六)―氷川(八三六)―九五〇(下)
 川苔谷入口(〇二五)―聖滝(〇四五)―〇五五―夫
 婦滝(二〇〇)―山伏沢(二三五)―二五〇―百尋滝
 (二二〇)―二二二(〇)―横ヶ谷(二三五)―三四五―川
 苔山頂(四三三)―三三〇―峰(六三〇)―山神(二
 七〇五)―鳩ノ巣(二七三)―八三三―立川駅着(二
 九三五)
 〔参加者〕菅野三三、横川(三三)、今井(二D)、鴻池(二
 D)、笹三(二D)

立川から日原に通ずる道は最近改修さ
 れて、勾配曲線とも大分ゆるやかになり
 たが、それでも中には以前として狭く、空
 にはケ―フルが架り、両岸の林はむざん
 にも代採されて、昔の鬱蒼たる静けさは
 全くなくなり山の平和は大分おびやかさ
 れてくる。しかし、昨秋から通る林にな
 った氷川日原間のパスは断崖の上を走り

心よのスリル?を味あわしにくれる。
 九時五十分氷川発のこのパスに約二十
 分ゆられて、大沢の次の川苔谷入口で
 下車する。この間は歩いて、小一時間
 で、七時十六分立川発の氷川行電車で
 行かれた方は駅から即座に歩いた方が
 時間的にも経済的で、途中日原川の景勝
 、奇地大沢等の古びた部落に目を楽し
 むせるのもよいだろう。
 谷へ入るには日原川との合流處に架
 かってゐる羽子板橋を渡りすぐに右岸に
 沿った小径を上るのだが、氷量の多い
 割に狭い入口なので歩いて初めて行つ
 た人はつい行き過ぎがちだから気をつ
 けた方がよい。いよいよ、から川苔
 谷遊行が始まるのだが、この辺の積雪は
 大したものとなく、三度や木の枝等に葉々
 とあるのみである。歩き始めて数分の
 間は両岸の樹木が倒され、運搬用のト
 ラックの出入が雪の多いのではなけだ気分
 を害し文明の力が癪にさわる。しかし
 こゝを過ぎれば谷は再び前の静けさに
 帰り、雪は尾根の北面を色どってト口
 道に添った軽快な歩行が始められる。

逆川との出合までの間に右岸に一つ左岸に五つの小沢を認めるが、左岸の五つ目の沢の所で径は二岐し、ト口道はこの沢を上る標になる。しかし川苔山へは径を左にとつて、ト口道とは分れへこ、に道標がある。間もなく大根岩の下へ着く。この右下方に落差五米の聖滝があるが、径からは相当離れた木の間に望む。と、径は出まらず、うっかりすると知らぬ間に過ぎてしまふ恐れがある。

左岸に深く喰い込んだ逆川を見送って、から、二つに分れた夫婦滝をやはり木の間に越し、見えて径は木の掛った所等を通る。やがて左側にそ、り立つ犬吊岩を見る。所で径は初めて丸木橋によつて左岸に移る。この辺から山伏沢までの陽の当らな谷間は約五纏から十纏の雪があるが、径はけつせりし迷う様な分岐もなく、行く手には本谷と火打石谷が望まれ、その間に丸山の尾根が南面を茶北面を白と二色に分けてのしか、る標に聳えてゐる。径は右、左と岸を変へつ、ぐん、高度を、まして、道端に二つ目の炭焼小屋を見送つた後、土橋によつて右岸に移ると左か

ら一つの沢が入りこ、が山伏沢出合である。この辺には階段状に作られた山椒があちらこちらに見られ、ついで土産にと親孝行な心？を起しがちであるが、手をポケットに入れ自分山岳愛好家だから山の作物は荒すまいと強くあきらめ、遠くから眺めるだけにしよう。

本谷は急角度に右折するので、ついで山伏沢に添った小径を登りたくなるが、山伏沢を丸木橋で渡り山の鼻へか、つて、を一気に登り切ると、もう百尋の滝までは十数分である。右岸からは火打石谷が入り、その上には足毛岩、足下にはけうらやみ淵がある。径が川に近ずき再度左岸へ渡ると雪もや、深くなつて、岩石の間をじぐざくに登ると突然、威圧的な瀑音を耳にし、小さな凸部を登り切ると眼前には高さ三十米と云う百尋の滝が現れる。この地奥は五万分の一の地、團川乗谷の川の字の処に当り、本谷出合より約二時間である。

この滝の水の少いのは唯一の嘆きであるが、まわりの輪廊や環境から見てかえつて、少い流水の清楚を善遊気持に

もなる。附近一帯は眞白な雪で氷柱が無
 数に下りキャンデーさながらである。
 滝壺から今来た径をせよ、もどり、小灌
 木と岩との間を丸山の尾根にとりつき約
 二十分の上りの後初めて分岐に着く。
 雪のある場合は大概前に通った人の足跡
 があるので径が明瞭であるが、それでも
 尾根や吹きだまりの処では不明になるこ
 とが往々ある。しかしピッケルやアイゼ
 ンの跡は長く残るものだからそれを頼る
 とよいと思う。
 さしてこの最初の分岐を右に取ると足
 毛岩の上、火打石谷を通ってウスバ峠を
 経ウスバ尾根にとりついで山頂に直登す
 る。ここが出来る。又左は仙元峠方面。又
 は横ヶ谷を通って川苔山に向ふことが出
 来るが、ウスバ峠から頂上迄の径は荒れ
 り、大カワをまわつて登るのは峠
 間的にも不経済なので、結局左の径を取
 った方がよいだろう。尾根にそつて登る
 ニ、約十分、指導標があつて再び径は二
 つに岐れ、右は今まで来た径の方へもど
 る様に上るが、この方を取るやがて径は
 三つに岐れるが、右へ下る。左は尾

二月五日の川苔山あ。一年の長は
 行きの際バスの中僕が入つてゐるから
 での話……バスその奥までました。
 は怒涛渦巻く日原と。Sの頭に次に
 川にそつた雪の積からめいたものは
 った細い道を急カニんを所を運転する
 一づを切りつゝ、運転手の月給は相当
 っばしる。ほんのよいだらうなあ。一
 五十糎も車輪が横やはりせちがらい世
 に行けば自動車は中の二とが二んを
 断崖の下に何回
 転かの後人間も
 ろとも転落だ
 最後部に乗つた
 我々一行は運転手時、初めて我に帰つ
 の持つハンドルのた皆の掌にはじつと
 些細な動きに心配り汗がにじんであつた
 。窓外の絶景？等。下車し、バスが遠
 は何の感心もなく見ると、高い一枚岩
 をつてしまふ。二を必死になつて登り
 年のSが云ひ出し切つた時の標に、難
 た「保険に入つて事をやりとけた後の
 おけばよかつたな安堵感を覚えた。(S)



根伝いに蹄平を通って行くことが出来るが、径もはつきりせず、帰りの時固もある。右を取り水のほとんどなれ、火打石谷の上流を渡って尾根の横をまいて再び橋ヶ谷を越える。この間左に分れる道らしいものがあるが、真直に歩を進めるがよい。横ヶ谷附近には二十粒近い雪があり、この山頂までは一時間必要とする。本当にこの辺の道は複雑であり、同遠くやいから気をつけてもらいたい。間もなく川苔山から派出された尾根の防火線にたどりつく。ここで初めて眺望が開け、突兀として聳える頂を仰ぐことが出来る。このからは尾根を一途に登ればよいが、登りは相当急で、この辺の積雪は約二十粒に過ぎない。下が二三十粒氷つておりよくすべるので、アイゼンが欲しい。急峻な上りを一気に登ると最初の凸部に、出、こ、でウスバ尾根と合してや、下り再び急登する。この数分、ようやくにして目指す山頂にたどり着くのである。

一三六三七米の二等三角標はさすがに憎い程の好展望台を築き、間近には大岳、御前、六ツ石等がまばらな窓を造り、その後にはどっしりとした雲取、三頭、西二は富嶽を始め丹沢の諸峯、北には白一色の白根、谷川が果てることなく波打っている。中でも奥多摩、溪谷の美しさは譬えようなく、深く深く尾根と刻んで最も印象的である。

例会記録

昭和二十一年山岳部創立以来約四十年の歳月が経ったわけだが、その間に於ける山行例会の株子を次に抜き出して見た。諸兄の思い出、或いは参考になれば幸いです。

◎二十一年度

- 一 高水三山 九・二二
軍畑―高水山―惣岳山―川井
 - 二 御嶽山 十二・九
御岳駅―御岳山―大塚山―吉里―沢井
 - 三 大山 十二・四
秦野―ヤマト峠―太山―伊勢原
 - 四 海沢 十二・四
御前―海沢―大岳山―御岳山―御岳駅
 - 五 雲取山 十二・二三・二三
三峯台―白岩山―雲取山―七石山―六石山―氷川
 - 六 臼杵山 十二・一
五箇中―伝名沢―臼杵山―五箇中
 - 七 日、出山
御岳駅―御岳山―日、出山―金岳山―五箇中
- 卒業生送別会

帰路は時間的にも距離的にも鳩ノ巣へ下るのがよいと思う。山頂から東へ約三百米下って地圍上数字一三六三・七米の六の字辺りの所で防火線から分れ、右の雑木林中へ入り（指導標あり）逆川の源流を通って再び防火線へ出るとこゝが毎井戸である。こゝからすぐに入川谷方面へ杉林中を下る径があるが、この径は途中で不明になるので防火線に沿ってゆるい傾斜を下る。やがて径は自然に防火線から密林の林に入つて急斜面を一散に走り下り、尾根の北側に出で左下に姥岩小屋、峰部落筭を見送つて大根の山の神の前に到着する。陽は既に傾き山の蔭を谷間に長くかけて、川苔の山頂は樹間にかくれてもう見えなない。こゝからは広い道をどん／＼下つて鳩ノ巣駅迄約二十分。山頂より駆まで約二時間の下りに見えるれば楽だろう。又、時間に餘裕さえあれば大ダワから太仁田山に登つて今ウマ山を経て鳩ノ巣へ出てきよく、この辺は指導標が完備している。

最後に繰り返し書いておくが、東京からの日帰りとしてはや、いそがしい為、登りは出来るだけいそいだ方がよいだろう。

(笹野記)

高橋山岳連盟へ入会

本校山岳部では部員希望により、この程、東京高専高等学校山岳連盟へ入会し、二月十八日には岸体育館に於て幹事会が開かれ、笹野がこれに出席致しました。新しく入会した各校の紹介、各中学校に於ける山行報告及び春の山行計画、会長の人選、雑談等があり、六時半解散となりました。連盟の専山所は日本山岳会内にあります。

白銀山 四六

早川―白銀山―強三原―根府川

二十二年度

一 大楠山 五・二五

横須賀―安針塚―衣笠(降雨のため打切)

二 日原鐘乳洞 六・二二

氷川―鐘乳洞―氷川

三 伊豆ヶ岳 七・十三

吾野―伊豆ヶ岳―旧正井峠―吾野

四 富士山 八・二二―二三

吉屋―山頂―御殿場

五 陣馬山 九・二四

吾野―陣馬山―栗俣山―小俣峠―浅川

六 金比羅尾根

五百中―金比羅山―日出山―二係尾

送別会

六ツ石山

氷川―六ツ石中腹(降雨のため打切)―氷川

二十三年度

送別会

御前山

氷川―橋寄―御前山―鍋山―氷川

一 丹沢表尾根

吾野―ヤヒツ峠―塔ヶ岳―浅沢

出づる想

特 集



アサヨ峯からの甲斐駒 (Y.S)

は地下足袋一人は軍靴と
荷負つた。以下はその時の
の足の弱い事はこの様で
登行したのである。今年北
になれば幸と思う。

第一日 大町―葛温泉―湯小屋―馬帽子岳の途甲
朝七時頃良く晴れ何となくそけくする様を朝で
ある。大町の駅前で葛温泉行のバスに押し込められ
一時間あまりゆられ葛温泉につく。高瀬川は未だ中
なく温泉の煙がほのかに立上っている。大部分の登
山者は温泉の方へ行くが僕等はそれだけの時間が

北アルプスも慕ひする(上)

二D 司馬正次

去年の八月始め 僕等三
人はあまりにも貧弱な恰好
で北アルプスも二銀座へと
志した。各自三升―二升五
合の米を持ち夫程豊富に食
糧を持たず、小屋へとまら
め予定で天幕をかついで出
掛けたのである。ピッケル
は僕一人しか持たず、二人

二 乾徳山

塩山―徳和―乾徳山―塩山

三 將藍峠―雲取山

塩山―柳沢峠―一瀬(泊)―將藍峠―龍龍山
―雲取山(泊)―雲取山―七治山―六石山―氷川

四 明神岳

大畑山駅―明神岳(前山)―大畑山駅

五 海沢

白丸―海沢―大岳山―馬頭川山―五百寺

六 明神―明星岳

塔沢―明神岳―明神岳―塔沢

◎ 二十四年度

一 小樺山

塩山―金峯泉―小樺山―金平―塩山

二 甲斐駒―仙丈鳳凰

日野春―七天小屋(泊)―甲斐駒―北沢小屋
―仙丈岳―北沢小屋(泊)―駒津峯―コサ

三 丹沢表尾根

コサ―青木館泉―穴山

四 川苔山

大養野―マビツ峠―塔ヶ岳―浪沢

五 氷川―聖流―百尋滝―川苔山―峰―旭

六 果

氷川―聖流―百尋滝―川苔山―峰―旭

ない。三人皆六貫位の荷を背負い非常なアルバイトである。途中の景色を人か目に入らず暑さと重さの連続である。しかし何となく今までの登山と違った真剣な緊張した感じがする。道はあまりよくなく白い反射が目立ちつく。佐保田の野菜がブラ／＼して非常に邪魔である。未だ二の辺はアルプスの感じは全くない。野菜を若干捨てやつとのこと。晝頃あの有名な強盗殺人事件のあった湯小屋につく。小屋は陰気で道の右側にあり先入観念からかもし恥めが周囲の景色も一きは陰鬱であり感じのよい所ではない。小屋の土方長に道を聞き右に大きく折れ高瀬川と別れ烏帽子岳への方へ行く。白い石の河原をケルンちたよりに、暑さにむせりながら右に左に右の上を歩いて行く。河原は中広く何も覆うもの、ない所を歩くのであるからそれこそたまらぬ。しかしこの辺にもはや「イハヨモギ」がみつた。道は平である。二の河原を暫く行くと川を横切り左の山の腹へ道が繞りていく。案内記によると二の距離八軒時間六時間とあつたので七時頃には烏帽

子小屋附近にキヤンテ出ると思つて登り始めた。道は急である。今まで二人を急な登り経験しなかつた九十九折の道で山腹を巻く幸第一度もない。又木はうっそうとしてしげりじめ／＼した細い道である。三分歩いて二分休み一折歩いて一休みせぬと登れぬ。後からは誰も登つて来ぬ。時間は何んども過ぎるが一向に登られぬ。気はあせつてもしようがない。三時、四時、五時、六時、七時、段々薄暗くなつて来る。しかし目的地へつかぬ。水筒の水は空になり日は暮れかゝつた。その時二人づれの大町の人で岩魚取りに行くと云う人と共になつた。その一行も八貫目からの荷物を持ち苦しいでいた。その一行と共に薄明りの中を尚急な道を登つた。しかし日付暮れ仕方なく一夜を位置もわからぬ山中で過さねばならなくなり僕等は非難した。仕方がない。水を探しに大町の人と境沢、佐保田が出掛け僕は天幕を張り薪を作らうにか野營の仕度をする。その夜は金魚の混じた水を呑みパンを

かじつて三人用の天幕に五人入つて寝た。夜気は甚だ寒く二回程目がさめた。

次二日 烏帽子小屋―野口五郎―赤岳―

水晶小屋跡

朝早く目が覚めた。境況も佐保田も起きていた。未だ日の出前で東の方がほの明るく昨夜暗くて全くわからなかつた。周囲がどうにもわからなかつた。それでも相当高い所らしく二一五〇米位はありそうだった。雲海のむこうの方の山の方から日が出る。しかしあまり美しく感激的でない。半分すっぽいパンを無理に食べ前進した。ふと気がつくくと段々木は薄くなりゴゼン夕々バナーが目につく様になつた。道もそれ程急ではなく十五分位は続けて登れる位になつた。小一時間で大きなガレの上に出た。頂上の近きを思はせるに十分であり大陽けうしろから朝日をなげかけ昨夜の悲観的な気分を一掃してくれた。同行の二人はカーバイトを一ぱい背負ひそれと岩鼻を取るとか云つてわりには気安かた。あまりパツとした小屋ではない。飯

を焚いてもらい朝食をすまし、烏帽子岳に敬遠してすぐ三岳を通り野口五郎の方へいそぐ。今日の目的は水晶である。大町の人も一しよである。道は大體よく平で周囲は全く木はなくごろごろした岩で所々に道松がある。赤岳から槍、燕、白馬等感じの山が北アルプスへ来たのだ。よろこびが全身をゆする。雪溪がある。始めてである。その水は冷く美味しい。その側には「サリン」芋、「イハカガミ」、「ミヤマキノボウ」ゲル、「キンバイ」等が咲いてる。空は青い。雪は白い。遠くの山は紺である。下には高瀬川のダムが小さく見え木がしげつてゐる。何よりその尾根道に木が一本もないことばうれしい。

送別会について

今春卒業される諸先輩の労を犒うため四月二十九、三十日に氷川山荘に於て送別会を開く。二十九日は懐旧談に花を咲かせ翌三十日は三頭登山の予定。



或出末事

一年 M T

春抜わすか千米の谷間も朝
 は寒い。暗い谷間々々に緑の
 窓も通して赤く染つた光がさし込んで水
 面に輝いてゐる。深い草をわけて行くと
 私達の行手に小鳥の聲がとび立って行く
 昨日通つて来た大滝からカロー谷出合
 迄のすざみにくらべて、この三又は平和
 を感じの谷だ。幽寂さを破るものは私達
 の潮る音のみ。ゴエモン窪附近から高ま
 いて、再び山葵の密生してゐる谷間に下
 つた。ふみ跡は消えながら山葵の間を
 何處迄も続いてゐる。朝の輝く光の中を

私達は先程からヤブをこいでゐる。高
 さ二米もある密生した熊笹。ともすると
 友さ失いがちだ。あまりにもむづか
 しい。いたし最初の潮行であるから、
 消えようものなら、實際支流と本流との区
 別がつかない。先づ第一の失策をこつた
 と本流面谷との間で起してしまつた。

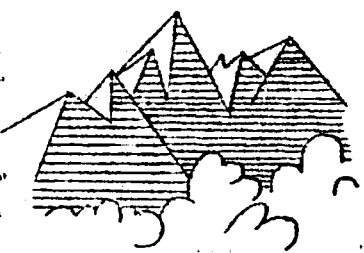
論日向谷と面谷と感違ひしたことに始
 まる。ゴツ谷は幽林と幽谷倒れ木とに
 つきてゐる。静まり返つた單調を感じ
 の沢である。水量は出合附近と異つて
 ゲンと減つてゐる。途中ケルンらしい
 ものを発見したため勇気一倍。やがて
 一段と傾斜がつけられ、どうやら
 一段と傾斜がつけられ、どうやら
 ら尾根に近づいたことを知らせてく
 る。

実に幼稚な山行であるが笑はずにい
 てもらいたい。誰ともなく右の斜面を
 登る事を云ひ出した。私は何の為かよ
 く覚えてゐないが二の案に反対して
 た。しかし三対一の結果は強引な尾根
 への突破となつた。登るにつれ熊笹が
 表れて来た。熊笹の原ほどはぬかぬか
 。そして強大な力をもつてはぬかぬか
 てくる。ヤブの疎の方へ、
 私達は右に走り左にわつた。時
 間はたまたまに時計の針をまわして
 る。やがて一つの高所に登つて復察を
 した結果、結果は尾根である。こゝがわ
 した結果、結果は尾根である。こゝがわ
 した結果、結果は尾根である。こゝがわ
 した結果、結果は尾根である。こゝがわ

る。左の夕ワ尾根の顛の右に秩父山塊の
 ロイヤル・ガードとも云うべき雲取山ら
 の頂の疎な所を見つけて下る。しかしそ
 こにも不運は待っていた。崖が二段に存
 つてゐる。無論右も左も行けない。こゝ
 を突破する為にはザイルが必要だ。しか
 かカツオツリ用のかもを一ぱいにのぼし
 て最初の崖を下ることにした。まぢ私が
 試みは岩ずたいにそろ／＼と降る。成巧
 の下降は成巧した。もう一つは大したこ
 ともないだろう。わすか足場をたより
 に進むと前方にやゝ安全な地を見出した
 とその瞬間、岩をトラバースしようとし
 た足もとがぐすねを吐いた。ザツツと土
 砂が落ちて行く。機本につかまろうとす
 る。目の前が真暗になつた。自然が一転
 してゐる。

全身がしがれる。強力な電気に触れた
 やうだ。どこかで私の名を呼んでいる。
 山のおなたで招いてゐる。二のまゝわ
 けてしまひそうだ。岩と岩との間にある

わすか平地に体をなげ出してゐる。
 これだけでも不幸中の幸だ。エの浪ほ
 コツ谷かな。アアラゼミが鳴いてゐる
 。又気が引きわかれて行くように。そ
 うだ山のおなたへ行くように。幸福を
 もとめて。
 或る夏の朝の出来事だつた。



山日記より
 二H 笹野幸夫

一 明神明星 (三三三)

朝六時五十分東京発の小
 田原行は空車の如く乗客も
 まぼらで箱根附近の一日行程山旅に
 は持つてこいた。小田原附近では強い
 驟雨があり山には朝虹がかゝつて前途
 の不安を感じさせた。しかし塔の沢駅
 の下車後間もなく雨も上つて折りから
 の太陽は暖く我々の上はふりそゞ今
 日の壯行を祝福した。
 僧禪誓の開基と伝えられる浄土宗で

有名な阿弥陀弁は落葉にうすもれ暗い陰を落していた。松坂ヒュッ子の残骸を見送り急登の後十二時半に明星岳山頂にたどりつく。こゝから約一時間、途中西にそびえる富嶽にカメラを向けたりしつゝ大小の起伏を越えて明神ヶ岳へ着く。半面急勾配にくづれ落ちた頂上で寒く、に打れつゝ遠近の絶景にしげし見入る。三時半明神ヶ岳発明星ヶ岳の南南に指かれた大文字焼きを眺めつゝ小径を強羅まで下る。案外すいた登山電車、汽車にゆられて八時二十分東京駅に帰る。

二 小樺山 (三三・五三)

塩山到着は夜の十一時過ぎ、直ちに昨年夏乾徳山登山を行つた跡と同じ路を窪平まで一時間飛ばす。五月と云つても夜の寒気は相当きびしい。窪平からは右手に秩父往還を見送り、懐中電灯、カンテラを頼りに琴川に沿つた伐採用のトロ道さかのぼる。夜の行程は案外ほかどる。三三電所を三時半に通過、四時半金泉にたどり着く。燃え上る焚火に身を暖めるうちに東の空はほのかに色めき待

望の朝を迎へ、こゝを六時半出発、高原を思わせる煙山峠を通り目的地小樺山の三角亭をじつかりと踏む。天気晴朗四圍闊洞、二枝のさへぎるものもなほ素晴しい展望である。殊に南アは白雪に輝き銀屏風の柵帰路は尾根道とより粗々たる道を下つて、二時半再び窪平に出る。あこがれのキャンデーに嚙りつきながらバスにゆられて三時塩山着。



新部員紹介

この程、次の十四名の方が入部されました。今後皆様の活躍されうことを期待致します。

- 一 六竹内 章
- 二 三 瀧池 泰夫
- 三 四 太田 勝敏
- 四 五 山口 雄弘
- 六 六 森沢 拓治
- 七 七 齊藤 嘉博
- 八 八 田中 將利
- 九 九 笹田 英次
- 一〇 一〇 宮地 圭持
- 一一 一一 田中 実
- 一二 一二 片桐 達夫
- 一三 一三 味村 道久
- 一四 一四 今井 言
- 一五 一五 和才 宏二

信 通 標 記

◎小河内方面行バス時刻表

○氷川駅発〔括弧内：行先〕

- 六五五(小河内)七〇〇(小河内)八四〇(丹波)九五〇(河内)
- 二〇〇(小河内)二二二(丹波)二四三〇(小河内)二五〇(河内)
- 一六五(小河内)一八〇(丹波)

○河内発氷川行

一〇二〇 一六二五

○小河内発氷川行

六〇〇 七五〇 八四〇 一二〇〇 一三二〇 一五二〇 一六四〇

一七五〇

○丹波発氷川行

五二〇 一〇二〇 一六〇〇

※料金(氷川より)

境 〇〇〇 水根 二〇〇 出野 三〇〇 河内 四〇〇
 川野 五〇〇 鴨沢 五五〇 親川 六五〇 保瀬 七五〇

丹波八〇〇〇

◎日原行バス時刻表

○氷川発

六五五 九五〇 一五〇〇

○倉沢橋発

七二〇 一〇三〇 一六〇五

※料金(氷川より)

大沢 一〇〇〇 倉沢橋 二〇〇〇

尚、近いうち日原の部落まで行く標になります。

編集後記

おいそがしい中を投稿下さった諸兄に対し、こころ重ねて感謝の意を示します。しかし、お願ひした原稿を出して下さらなかった一部の方もあり、本号がせよ、題意にそわないものになってしまひましたことと遺憾に思つております。編者としたしましても、南平の思ひ出をせなかつたこと、又内容が紀行文が多すぎて単純になつてしまひましたことを残念に思ひます。今後ともその貞気を上げますと共に、諸兄の楽しい山便りを期待致します。

最後に、期不考査によつて発行がおくりましたことをお詫言ひ、梅尻の言とします。

(編集者)

部 報 第 二 号

非 売 品

昭和二十五年二月二十八日印刷
 昭和二十五年三月一日発行

編集兼 発行人 笹野 幸夫

発行所 都立西高等學校 (旧十高)

山 岳 部

東京都杉並区大宮前三、二一八
 電話 荻窪(39) 三二八六

登山用具
スキー用具
スポーツ用品

販賣!

西荻窪

不用品の買入れも致します

“山の愛好家”

かみなりや

杉並区大宮前6, 310

山の薬は

杉並区大宮前六丁目

三仁堂薬局

新刊書籍雜誌

中等高等教科書

光南堂書店

杉並區大宮前六、三〇九
電話 荻窪(39) 四一八

西高山岳部報

昭和二十五年三月一日發行